

日本英文学会九州支部第 72 回大会

期日 2019 年（令和元年）
10 月 26 日（土）・27 日（日）

場所 熊本県立大学
(熊本県熊本市東区月出 3 丁目 1 番 100 号)

日本英文学会九州支部
〒819-0395 福岡市西区元岡 744
九州大学基幹教育院
大橋浩研究室内
TEL (092) 802-6034
E-mail: elsj.kyushu.branch@gmail.com
HP: <http://kyushu-elsj.sakura.ne.jp>

2019-20 年度 日本英文学会 九州支部 理事一覧

鶴飼	信光	(九州大学)
大島	由起子	(福岡大学)
大津	隆広	(九州大学)
大橋	浩	(九州大学)
木下	善貞	(北九州市立大学名誉教授、福岡女学院大学)
後藤	美映	(福岡教育大学)
小林	潤司	(鹿児島国際大学)
高野	泰志	(九州大学)
高橋	勤	(九州大学)
竹内	勝徳	(鹿児島大学)
西岡	宣明	(九州大学)
虹林	慶	(熊本県立大学)
早瀬	博範	(佐賀大学)
福田	稔	(宮崎公立大学)
山田	英二	(福岡大学)

2019 年度 日本英文学会 九州支部 事務局員一覧

支部長・日本英文学会理事	大橋	浩
副支部長	大津	隆広
『九州英文学研究』編集委員長	小林	潤司
事務局長	田中	公介
書記	西村	恵
書記	大塚	知昇
書記	永次	健人

2019 年度 日本英文学会九州支部第 72 回大会 開催校委員一覧

虹林 慶（開催校責任者）、村尾治彦、難波美和子、野々宮鮎美、吉田希依

熊本市立大学 アクセスマップ

〒862-8502 熊本市東区月出3丁目1番100号

TEL 096-383-2929 / FAX 096-384-6765



1) JR 熊本駅から

1-1) バス利用の場合：バスにより交通センター下車（約10分）→「熊本交通センターから」を参照

1-2) 市電利用の場合：市電により辛島町電停下車（約10分）、その後交通センターまで徒歩約2分→「熊本交通センターから」を参照

1-3) JR 豊肥本線の場合：JR 豊肥本線により新水前寺駅もしくは水前寺駅下車（約10分）→「JR 新水前寺駅方面「水前寺駅通り」バス停から」、「JR 水前寺駅方面北口「熊高正門前」バス停から」を参照

2) 高速バス利用の場合

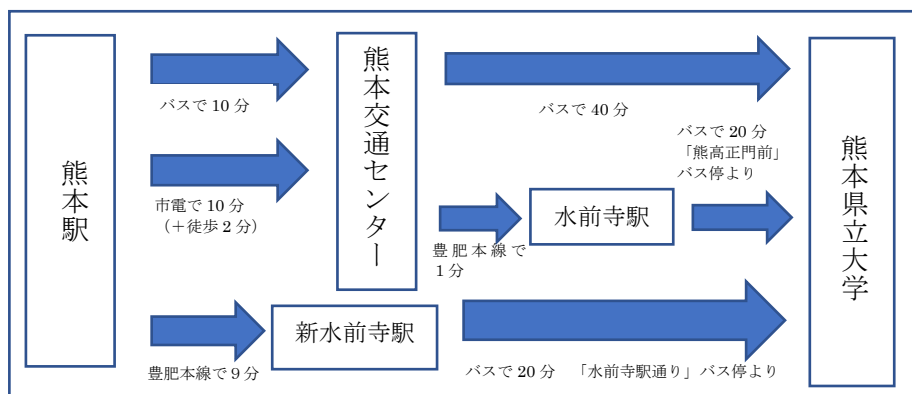
2-1) 益城熊本空港インター経由便の場合：益城熊本空港インターチェンジを降りてから2つ目の「自衛隊前」バス停で下車。タクシー乗車 約10分（約2.2km）

2-2) 熊本インター経由便の場合：熊本インターチェンジを降りてから3つ目の「帯山中学校前」バス停で下車。タクシー乗車 約10分（約2.5km）

3) 車の場合

熊本インターで降りて、約15分

益城熊本空港インターで降りて、約10分



九州産交バス時刻表



熊本都市バス時刻表

バス利用案内

■ 熊本交通センターから

16～20 番のりば

- ・ 都市バス「日赤・長嶺団地・月出」行（「県 1」、「味 1」、「味 2」表示）「県立大通り」又は「県立大学前」バス停下車（約 40 分）徒歩 1 分。
- ・ 都市バス「日赤・長嶺小学校前」行（「鹿 10」表示）「日赤病院前」バス停下車（約 30 分）徒歩 1 分。
- ・ 産交バス「パークドーム」行（「鹿 8」表示）「日赤病院前」バス停下車（約 30 分）徒歩 1 分。
- ・ 産交バス「戸島」行（「鹿 7」表示）「日赤病院前」バス停下車（約 30 分）徒歩 1 分。

■ JR 新水前寺駅方面「水前寺駅通り」バス停（新水前寺駅より徒歩 2 分）から 都市バス「日赤・長嶺団地・月出」行「味 2」、「県 1」表示「県立大通り」バス停又は「県立大学前」バス停下車徒歩 1 分。

■ JR 水前寺駅方面北口「熊高正門前」（水前寺駅より徒歩 5 分）バス停から 都市バス「日赤・長嶺団地・月出」行「味 1」、「鹿 3」表示「県立大通り」バス停又は「県立大学前」バス停下車徒歩 1 分

（ご注意）

- * 熊本駅から大学方面直通のバス（鹿 8：免許センター行）がありますが、本数が少ないのでご利用の際はご注意ください。
- * 高速バス利用の場合、「県庁前」下車、徒歩 3 分の「砂取校前」から「県 1 日赤・長嶺団地行」乗車または、「水前寺公園・県立図書館前」下車、道路反対側のバス停から、「県 1 日赤・長嶺団地行」乗車、「県立大学通り前」下車（約 20 分）を利用することも可能です。ご利用のバス停の時刻表をご確認ください。
- * 26 日（土）の懇親会に出席後、熊本駅へ向かわれる場合は、「市立体育館前」が最も便利な電停です。
- * 車でお越しになる場合は、26 日（土）、27 日（日）ともに、車両門からの入構が可能です。
- * 宿泊については、水前寺エリアが比較的大学へ近く、便利です。
- * 宿泊施設情報については、下記の英文学会九州支部のホームページをご覧ください。
<http://kyushu-elsj.sakura.ne.jp>

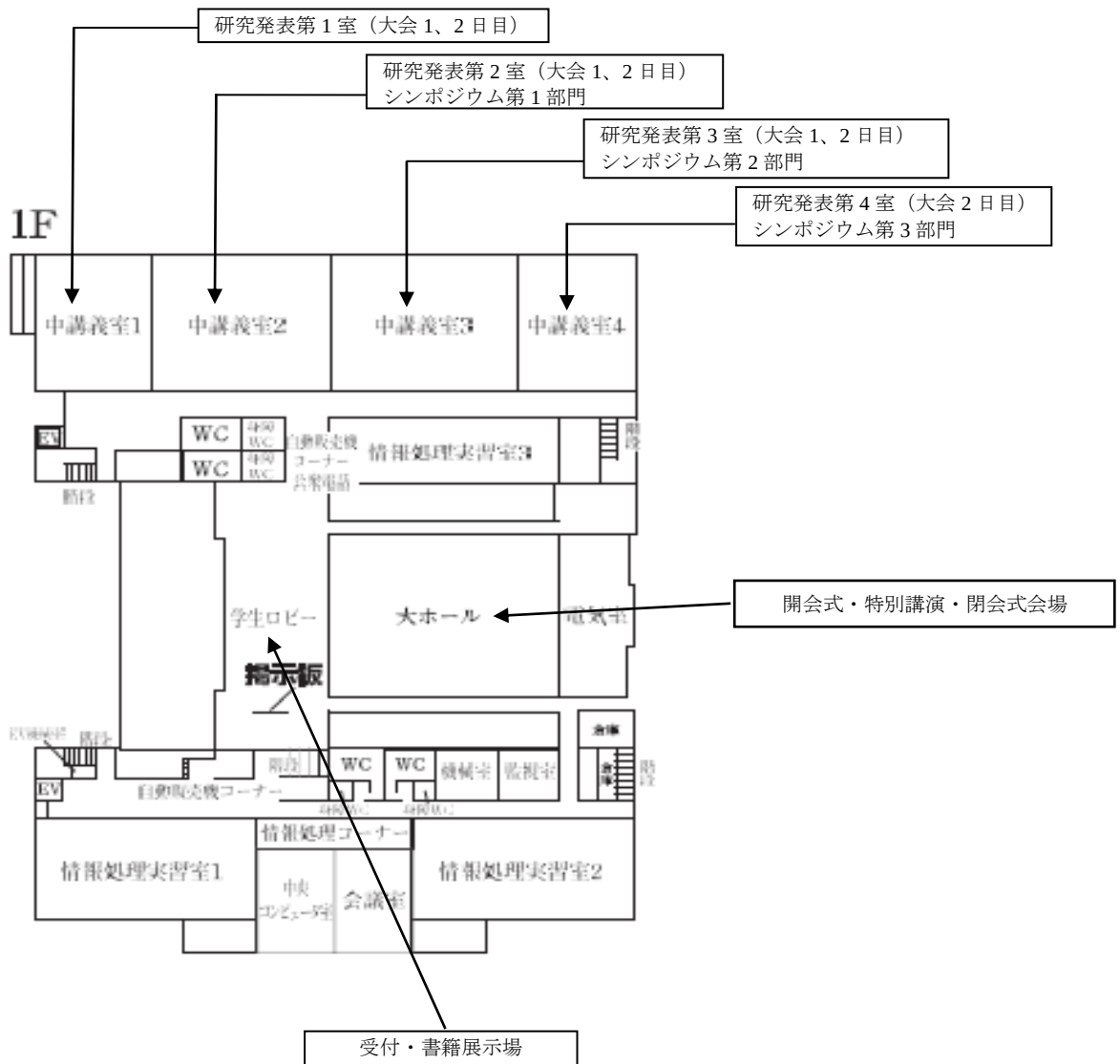
熊本県立大学 キャンパス・マップ

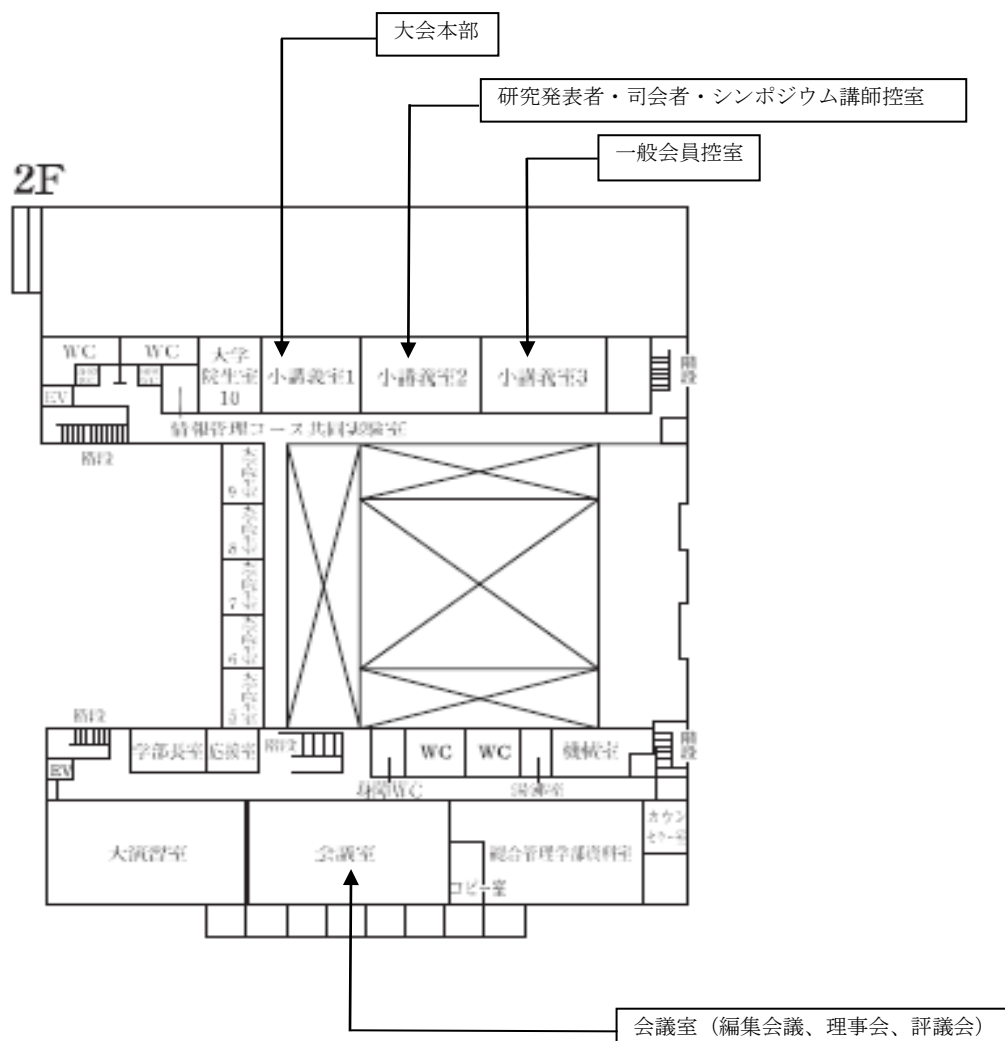


*10月26日(土)、27日(日)両日とも学内の食堂は閉まっております。昼食をご準備いただくか、弁当をご購入ください。27日(日)の弁当を事前の予約にてご用意いたします。詳しくは日本英文学会九州支部 HP (<http://kyushu-elsj.sakura.ne.jp>) をご覧ください。



会場案内 (講義棟2号館平面図)





大会本部：小講義室 1

会議室：会議室（編集会議、理事会、評議会）

受付・書籍展示場：大ホール前学生ロビー

開会式・特別講演・閉会式：大ホール

シンポジウム第 1 部門（イギリス文学）：中講義室 2

シンポジウム第 2 部門（アメリカ文学）：中講義室 3

シンポジウム第 3 部門（英語学）：中講義室 4

研究発表第 1 室：中講義室 1

研究発表第 2 室：中講義室 2

研究発表第 3 室：中講義室 3

研究発表第 4 室：中講義室 4

発表者・司会者・シンポジウム講師控室：小講義室 2

一般会員控室：小講義室 3

懇親会会場：ホテル熊本テルサ 大樹（3F）

懇親会会場 (大学より送迎バスで移動します)



懇親会会場：ホテル熊本テルサ 大樹（3F）

バス

- 熊本都市バスでは「熊本テルサ前」バス停がご利用いただけます（中心部から15分）
 - 空港リムジンバス「熊本県庁前」バス停から徒歩5分
 - 高速バス・各種バス「熊本県庁前」バス停から徒歩5分
- ※ 県庁バス停からは、県庁の敷地内を通り抜けられます。

市電

- 熊本市電「市立体育館前」電停から徒歩10分

車

- 熊本ICから車で15分
- 益城熊本空港ICから車で15分

大会日程

10月26日(土)

開会式 (13時)

大ホール

研究発表 (①13時30分 ②14時10分)

第1室 (イギリス文学)

中講義室1

第2室 (アメリカ文学)

中講義室2

第3室 (英語学)

中講義室3

シンポジウム (15時～17時30分)

第1部門 (イギリス文学)

中講義室2

第2部門 (アメリカ文学)

中講義室3

第3部門 (英語学)

中講義室4

懇親会 (18時30分～20時30分) (会費 5,000円 学生 3,000円)

10月27日(日)

研究発表 (①10時 ②10時40分 ③11時20分 ④12時 ⑤12時40分)

第1室 (イギリス文学)

中講義室1

第2室 (アメリカ文学)

中講義室2

第3室 (英語学)

中講義室3

第4室 (英語学)

中講義室4

特別講演 (14時00分)

大ホール

閉会式 (15時30分)

大ホール

受付

大ホール前学生ロビー

研究発表者・司会者・シンポジウム講師控室

小講義室2

一般会員控室

小講義室3

書籍展示会場

大ホール前学生ロビー

大会本部

小講義室1

日本英文学会九州支部第 72 回大会プログラム

日 時：2019 年 10 月 26 日（土）・27 日（日）

場 所：熊本県立大学

第 1 日 10 月 26 日（土）

（受付は正午より大ホール前学生ロビー（講義棟 2 号館 1 階）にて行います。受付では年会費の納入はできません。）

開会式 13 時 00 分より（大ホール）

開会の辞	司会・九州大学教授	大津 隆広
開催校挨拶	支部長・九州大学教授	大橋 浩
開催校案内	熊本県立大学副学長	堤 裕昭
事務局報告	熊本県立大学教授	虹林 慶
優秀論文賞等選考報告	事務局長・産業医科大学准教授	田中 公介
	編集委員長・鹿児島国際大学教授	小林 潤司

研究発表（①13 時 30 分 ②14 時 10 分）

第 1 室（中講義室 1）

- | | | |
|--|-----------------|-------|
| 1. John Donne “Divine Meditations”における物語——身体表象を中心に | 司会 福岡大学教授 | 園田 暁子 |
| | 熊本県立大学大学院博士後期課程 | 鳥養 志乃 |

- | | | |
|---------------------------------------|-------------|-------|
| 2. <i>Dubliners</i> における家族の肖像写真に見る共同体 | 司会 福岡大学准教授 | 福原 俊平 |
| | 熊本高等専門学校准教授 | 岩下いずみ |

第 2 室（中講義室 2）

- | | | |
|---|------------------|-------|
| 1. 翼を折りたたんだヒロイン——『カサマンマ公爵夫人』におけるクリスティーナ | 司会 九州ルーテル学院大学准教授 | 砂川 典子 |
| | 九州大学大学院博士後期課程 | 川村 真央 |

- | | | |
|---|---------------|-------|
| 2. サトペンの南部的再構成
——『アブサロム、アブサロム！』におけるクエンティンの語りのパフォーマンス | 司会 西南学院大学教授 | 藤野 功一 |
| | 九州大学大学院博士後期課程 | 松下 紗耶 |

第 3 室（中講義室 3）

- | | | |
|-----------------------------|-------------|-------|
| 1. 非定形節からの抜き出し——フェイズ理論の観点から | 司会 福岡工業大学教授 | 宗正 佳啓 |
| | 九州大学大学院修士課程 | 作元 裕也 |

2. 分裂文の派生と焦点要素について

産業医科大学助教 下仮屋 翔

シンポジウム (15 時～17 時 30 分)

第 1 部門「イギリス文学」(中講義室 2)

English Literature Education in India, Past and Present, With Reference to the Japanese Experience

司会	熊本県立大学准教授	難波 美和子
講師	明治大学兼任講師	青木 (伊東) 敬子
講師	筑波大学准教授	斎藤 一
講師	デリー大学 Mothilal Nehru College 准教授	Munish Tamang

第 2 部門「アメリカ文学」(中講義室 3)

女性と文学を政治と法から考える——アメリカ女性参政権承認から 100 年を期に

司会・講師	長崎大学教授	鈴木 章能
講師	琉球大学教授	喜納 育江
講師	名古屋女子大学教授	羽澄 直子
講師	明治学院大学教授	森 あおい

第 3 部門「英語学」(中講義室 4)

これからの英語コーパス研究

司会・講師	熊本学園大学教授	堀 正広
講師	熊本学園大学講師	矢富 弘
講師	北九州市立大学講師	木山 直毅
講師	京都外国語大学名誉教授	赤野 一郎

懇親会 (18 時 30 分～20 時 30 分)

場所 ホテル熊本テルサ 大樹 (3F) (会費 5,000 円 学生 3,000 円)

第 2 日 10 月 27 日 (日)

(受付は大ホール前学生ロビー (講義棟 2 号館 1 階) にて行います。受付では年会費の納入はできません。)

研究発表 (①10 時 ②10 時 40 分 ③11 時 20 分 ④12 時 ⑤12 時 40 分)

第 1 室 (中講義室 1)

司会 福岡工業大学准教授 原田 寛子

1. The Return of the Repressed: An Analysis of the Uncanniness in the Repetitions of *A Pale View of Hills*
九州大学大学院博士後期課程 SUN JINGLU

司会 九州大学教授 鶴飼 信光

2. 時間と文学——ハリーポッターシリーズの時間的要素

保健医療経営大学准教授 小手川巧光

	司会 福岡大学教授	井石 哲也
3. 『エマ』における誤解——感情の偽装と増幅と抑制	九州大学大学院修士課程	末吉 愛里

	司会 福岡大学准教授	渡部 智也
4. Pickwick Papers における声の文化と文字の文化——信じられる声、信じさせる文字	九州工業大学非常勤講師	原田 昂
5. ディケンズの公開朗読台本をめぐって——書かれたテキストと〈声〉 (招待発表)	鹿児島大学教授	井原慶一郎

第2室 (中講義室2)

1. 【発表なし】
 2. 【発表なし】
-

	司会 鹿児島大学准教授	千代田夏夫
3. ヘミングウェイを繰り返すデイビッド・ボーン——『エデンの園』におけるモチーフの繰り返し	九州大学大学院修士課程	森田 司

	司会 琉球大学教授	喜納 育江
4. <i>Almanac of the Dead</i> における Sterling の成長——“The Indian Ring”と石の蛇	福岡大学博士課程前期	大宅由加利

	司会 福岡大学教授	光富 省吾
5. ブロードウェイ・ミュージカルにおける人種とコミュニティ (招待発表)	九州大学准教授	岡本 太助

第3室 (中講義室3)

	司会 西南学院大学准教授	前田 雅子
1. 二次述語構文の構造について——叙述の二次述語構文の統語構造	九州大学大学院修士課程	久保田 舞

	司会 宮崎公立大学教授	福田 稔
2. 主格目的語の派生と構造	九州大学大学院修士課程	森竹 希望

3. 遊離数量詞の派生と構造に関して	九州大学大学院修士課程	川満 潤
--------------------	-------------	------

4. 【発表なし】

5. 【発表なし】

第4室（中講義室4）

1. 【発表なし】

2. 【発表なし】

	司会	琉球大学教授	石原 昌英
3. 悪役名の音象徴——悪役の名前を喚起する子音の調査		福岡大学4年	神谷祥之介

	司会	長崎大学教授	廣江 顕
4. 仮定法をとる as though 節と even though 節における if 節との blending		九州大学大学院博士後期課程	高場 清子

	司会	福岡大学教授	古賀 恵介
5. 300 Years of English-Grammaticography and Stativity: 進行形を中心に (招待発表)		九州工業大学教授	樋口万里子

特別講演 14時00分より (大ホール)	司会	九州大学教授	大橋 浩
北海道大学名誉教授 高橋 英光			
「行為指示表現における動詞と二重目的語構文」			

閉会式 15時30分より (大ホール)			
挨拶		熊本県立大学教授	虹林 慶

〈第1日〉10月26日（土）

研 究 発 表

第 1 室（中講義室1）

司会 福岡大学教授 園田 暁子

1. John Donne “Divine Meditations”における物語——身体表象を中心に

熊本県立大学大学院博士後期課程 鳥養 志乃

本発表では、John Donne の“Divine Meditation”が語り手の抱く自他の身体への意識によって大きく三つの物語群に分類できると主張する。一つ目の物語群は、死を目前とした語り手が地獄に落ちる前にキリストの血によって自身の魂が贖われてほしいと願う内容であり、二つ目の物語群が神の創造物の罪を贖う為に身代わりとして亡くなったキリストの身体と生かされた自分自身の身体に目を向ける詩群である。三つ目の物語群ではキリストには触れず、創造主である父なる神を相手に自身との関係性に重きが置かれる。これらの作品はお互いに断絶している訳ではなく、いくつかの作品が複数の物語群に属することでグラデーシオンの様に関連性を持ち、一つの大きな物語を展開している。本発表が示す考察により、現在“Divine Meditation”の定説とされる順番とは異なる、新しい読み方が可能であることを提示する。

司会 福岡大学准教授 福原 俊平

2. *Dubliners* における家族の肖像写真に見る共同体

熊本高等専門学校准教授 岩下 いずみ

本発表は James Joyce 作 *Dubliners* (1914)のうち“Eveline,” “A Little Cloud,” “The Dead”で描写される家族の肖像写真に注目する。家族の肖像写真の特徴に見られる当時のアイルランドの社会背景を通して、共同体のあり方について考察したい。家族が映った肖像写真が結婚、家族、共同体の確認作業の一つでもあったことから、大飢饉の影響が色濃い十九世紀末から二十世紀初頭のダブリンにおいて、結婚、家庭生活が肖像写真を通してどのようにして描かれているかを分析する。アイルランド大飢饉が与えた結婚年齢への影響や貧困、男女それぞれの結婚に関する作品考察を踏まえ、ジョイスが描き出した共同体、そしてその共同体が抱える問題点を明らかにする。*Dubliners* 以降の作品でも描かれる共同体のあり方について、家族の肖像写真は一つの道筋を与えると考えられる。

第 2 室 (中講義室 2)

司会 九州ルーテル学院大学准教授 砂川 典子

1. 翼を折りたたんだヒロイン ——『カサマシマ公爵夫人』におけるクリスティーナ

九州大学大学院博士後期課程 川村 真央

ヘンリー・ジェイムズが、『ボストンの人々』(1886) と同時期に執筆した『カサマシマ公爵夫人』(1886) は、主題、小説技法ともに、初期から中期への転換点とされている。これまでの先行研究においては、特に主人公ハイアシンス・ロビンソンに注目した研究が多くなされており、彼の自殺という結末は、上流階級と労働者階級との間で揺れ動く、自分のアイデンティティに対する葛藤が引き起こしたものだといえられている。

一方で、作品のタイトルであり、なおかつジェイムズには珍しく、他作品で描かれたカサマシマ公爵夫人、すなわち『ロデリック・ハドソン』(1875) に登場したクリスティーナ・ライトは、これまで、議論の中心にはなっていない。ジェイムズは、序文のなかで、クリスティーナの再登場に言及するものの、多くを明かさず、謎めいた印象を与えている。これは、本作品を解釈するうえで彼女の重要性を示しているといえられないだろうか。彼女の名前がタイトルとなった理由は、ジェイムズが語らなかった再登場の理由と関わっていると考えられる。本発表では、ハイアシンスの物語ではなく、彼の視点から描いたクリスティーナの物語として捉えなおし、作品に新たな光を当てたい。

司会 西南学院大学教授 藤野 功一

2. サトペンの南部的再構成——『アブサロム、アブサロム！』におけるクエンティンの語りのパフォーマンス

九州大学大学院博士後期課程 松下 紗耶

ウィリアム・フォークナー『アブサロム、アブサロム！』(1936)では、トマス・サトペンが抱く「デザイン」のプロットを中心に、南北戦争前後の南部でサトペン一家に起こった出来事が語られる。『アブサロム、アブサロム！』は、その難解な語りゆえに、多くの解釈を生み出してきたが、クエンティンとシュリープによるサトペンの栄枯盛衰物語の再構成は、南部歴史の寓話になっているという批評家たちの見解は一致しているだろう。

しかし本発表では、サトペンは「有色人種といえばインディアンしかない」ウェスト・ヴァージニア出身であることに着目し、クエンティンの語るサトペン像と、読者である我々がその語りから構築できうるサトペン像に乖離がある可能性を探る。これまで南部人として解釈されてきたサトペン像の新たな読みを提示することで、ローザやミスター・コンプソンの語りを絡めとりながらサトペンを再構成する際に、どうしても自らの南部観を投影してしまうクエンティンの姿を浮き彫りにすることを目的

とする。

第 3 室 (中講義室 3)

司会 福岡工業大学教授 宗正 佳啓

1. 非定形節からの抜き出し——フェイズ理論の観点から

九州大学大学院修士課程 作元 裕也

本発表では、*Wh* 句の抜き出しに関する非定形節と定形節の差異を、従来のフェイズ理論では正しく捉えられないことを指摘し、新しい分析方法を示すことを目的とする。

Wh 句を指定部にもつ非定形従属節からの *Wh* 句の抜き出しは、同様の定形節からの抜き出しに比べて容認性が高い。

- (1) a. ?*What_i* did you wonder whether to fix *t_i* ?
b. **What_i* did you wonder whether he fixed *t_i* ?

近年のミニマリスト分析では、移動の制約はフェイズによって説明されるようになったが、定形節と非定形節の文法性を正しく捉えられていない。そのため、本発表では、Chomsky (2013,2015)の枠組みと Hornstein (1999,2003)の移動分析を採用した上で、 ϕ 素性の一致がない場合フェイズ性がなく、フェイズ不可侵条件(Phase Impenetrability Condition: PIC)に違反しないと主張する。この分析によれば、非定形節では *Wh* 句の抜き出しが可能となる。その容認性が英語母語話者によって異なることに関しては、最小連結条件(Minimal Link Condition: MLC)に違反しているためであり、それは PIC の違反よりも悪くないことを提案する。

2. 分裂文の派生と焦点要素について

産業医科大学助教 下仮屋 翔

英語の *It* 分裂文の焦点位置に生じる要素は、名詞句と前置詞句が規範的であるとされる (cf. Emonds (1976))。しかしながら、これらの範疇が焦点要素として容認されない事例や、他の範疇に属する要素が容認される事例も観察されてきたことから、同一範疇でありながらも文法性が一様に導けないことが理論的課題となる。

そこで本発表では、ラベル付けアルゴリズム分析とカートグラフィ分析の観点から当該構文の統語構造と派生を分析し、その文法性の原理的な説明を試みていく。具体的には、焦点位置での照応形束縛や内部からの部分摘出の事実には照らして、分裂文の焦点要素は前提節内に基底生成すると提案する。そして、派生の過程で焦点要素がフェイズ主要部の左端周辺部 (FocP 指定部) へと移動したのち、適切なラベル付けの可否に応じて文法性が捉えられると主張する。

シンポジウム

第 1 部門「イギリス文学」(中講義室 2)

English Literature Education in India, Past and Present, With Reference to the Japanese Experience

司会	Prefectural University of Kumamoto, Associate Professor	Miwako NAMBA
講師	Meiji University, Lecturer	Keiko AOKI-ITO
講師	University of Tsukuba, Associate Professor	Dr. Hajime SAITO
講師	Delhi University Motilal Nehru College, Associate Professor	Dr. Munish Tamang

Looking at the experience of English study in India, we will reconsider the discipline of “English” in Japan. The two countries have in common the way in which they adopted the idea of English Literature as a major component of general education. However, in other ways the two countries’ experiences diverge, and the narrative of English Literature has changed according to historical conditions. Whereas in Japan English has never been a true literary language, in India, English became a major language in literature, necessitating a redefinition of English Literature. As Gauri Viswanathan said in *Masks of Conquest: Literary Study & British Rule in India* (1990), it is true to say that English Literature has adapted to the British educational system, and indeed English itself has metamorphosed.

After three short talks, we will discuss the what lies behind the changing conceptions of English Literature.

English Literature Education in England

Keiko AOKI-ITO

The teaching of English in England is always a political matter. English has been one of the core subjects in the National Curriculum since 1988. The Education Reform Act of 1988 led to the establishment of the National Curriculum and national assessments monitored by an inspectorate whose goal is ongoing reform. However, at the end of the 19th century, English as a subject was not established as part of formal education although the study of English Literature had just appeared in higher education. In 1921, the government issued the Newbolt Report, which was the first formal paper for the teaching of English. It revealed the real situation of teaching English in all institutions in England and attracted a great deal of attention to the importance of the role of the national language and literature at all educational levels. Since then, the status of English as a school subject has become more established and has continued to be connected with political concerns.

Shakespeare in the Post-World War II Hiroshima

Dr. Hajime SAITO

William Shakespeare’s plays have been hugely popular in Japan particularly from the mid 19 century to the present day probably because the bard and his works have been regarded as being representative of English literature. In Hiroshima, the city whose central area was

destroyed by the US army's dropping of an atomic bomb, Shakespeare seems to have represented something else: his famous plays such as *Romeo and Juliet*, *Hamlet* or *King Lear* have been performed by high school and university students in relation to, for example, the post-war reconstruction of the city, the newly established coeducation system and the proliferation of the "no more Hiroshimas" ideals. These Shakespearean experiences in a local city might help us reconsider the significance of the education of English literature in the whole of the post-war Japanese society.

The Trajectory of English Studies in Delhi University

Dr. Munish Tamang

English Departments occupy a very important position in Indian Universities. Besides, offering Literature Programme at the undergraduate and postgraduate levels, the department also offers Language programmes for almost all other disciplines in the university. These language programmes also include English for specific purposes.

In India, English is seen as a language of aspiration as well as a link language to the world. It would therefore be interesting to see how the English department negotiates these positions within the university. My presentation will explore the trajectory of English studies in India with reference to Indian universities in general and Delhi University in particular. In doing so, I shall draw from my own experience as a student and as a faculty of the University. The presentation will examine the changes in the syllabus as also the debates and arguments informing these changes. The presentation will also analyse how the newer elements in the changing syllabus have impacted both the reception and pedagogical experience within the teaching-learning community.

第2部門「アメリカ文学」(中講義室3)

女性と文学を政治と法から考える ——アメリカ女性参政権承認から100年を期に

司会・講師	長崎大学教授	鈴木 章能
講師	琉球大学教授	喜納 育江
講師	名古屋女子大学教授	羽澄 直子
講師	明治学院大学教授	森 あおい

アメリカでは1920年に女性参政権(憲法修正第十九条)が承認された。以来、いやそれ以前から、様々な人々が女性差別と闘ってきた。その間、権利の獲得のために意見や戦術が割れたり、州対連邦、アメリカニズム、帝国主義、資本主義(反共)といった要素も影響して、様々な問題を残したりカバーしたりして現在にいたる。そしていまなお、残された、あるいは新たに顕現している女性の課題は多々ある。

文学が、ある社会とそこに生きる人間を表象する限り、時代の運動と政治や法が作品の文脈となっていることは想像に難くない。また、文学は、政治や法の諸問題や死角に切り込んで異議を申し立てたり、新たに顕現した問題に対峙したりしてきた。過

去を振り返って見落とされていることはないか。また将来に向けて文学はどのような役割を担えるのか。

参政権が承認されて 100 年を期に、文学について女性を巡る法や政治から、あるいは女性を巡る法や政治について文学から、読み直し、また考えてみたい。

「万国の文学よ、団結せよ！」 ——アルゴリズム・クローンの時代に

鈴木 章能

政治と法をコンテクストにして文学（作品および批評）を参政権承認の時代から概観しつつ、女性ならびに文学の今日的課題について考える。まず、男性中心主義と見られる 20 世紀初頭のいくつかの作品を参戦支持の見返りとして手に入れた女性参政権へのプロテストとして検証する。戦後になると女性の権利を巡る闘いは多文化的な展開を見せたが、冷戦もあって「見えない」存在となった女性たちがいた。いくつかの作品を例にとり、政治と読みの規範について振り返ってみる。グローバル社会と呼ばれる今日では、女の特権化がマイノリティ化になっている問題と階級差別の問題がある。この問題は、先述の「見えない存在」を生んだ政治等の帰結であり、現在の文学弱体と要因を同じくする。文学は今後、女性の問題にいかに対峙するのか。クリスティヴァは「資本主義は〔各人の〕主体に反抗の権利は与えるものの、鎮圧する権利は手放さない」と言ったが、社会全体を俯瞰し異議を申し立てるためには文学(者)の連帯が必要ではないだろうか。

法律はどの女性の権利を守ってきたのか ——*Desert Blood: The Juárez Murders* におけるチカーナの身体

喜納 育江

合衆国憲法修正第 19 条による女性の参政権獲得はアメリカ女性にとって歴史的快挙だった一方、100 年前のアメリカで想定された「アメリカ女性」と比べ、今日のアメリカ女性は、人種や経済、そして性志向において多様であり、さらに移民女性も視野に入れると、どの女性も等しくその尊厳を擁護されているとは言い難い。

テキサス州エルパソから米墨国境を隔てた町フアレスで起こっている連続女性暴行殺害事件は、そうした現実の一つである。フアレスでは、1993 年から 2007 年の間に 400 人近くの女性が暴行・強盗の末に殺害されており、その犠牲者の多くが貧困層出身の若い女性だった。それは、法による抑止が効かないほどに肥大化した人間の欲望に消費される女性の身体だった。本発表では、経済のグローバル化による貧困、差別、暴力が、今日の「アメリカ女性」をいかに分断しているかについて、アリシア・ギャスパー・デ・アルバの小説 *Desert Blood: The Juárez Murders* を通して考察する。

女性参政権は悪魔の誘惑!? ——奪われた権利と「物言う女」への恐れと嫌悪

羽澄 直子

1840年7月セネカフォールズにおける女性の権利会議で、女性の参政権は「譲り渡すことのできない、一番大切な市民の権利」と宣言された。参政権とは社会に自分の意見を反映させ、公の意思決定に関わる権利である。参政権がなければ自分たちの代表を選ぶことや直接立案に関わることはできない。女性たちが正しいと思うことを実現させるには、政治力のある男性を感化して間接的に社会を動かすしかなかった。

女性参政権獲得運動は、特に男性からの非難にさらされた。参政権を求めて活動する女性たちは、女性の領域を逸脱するとして揶揄された。文学の世界では「反フェミニズム小説」が、社会規範に背く女性に降りかかる災いを読者に訴えかけた。

女性参政権に対する嫌悪の強さは、女性が権利を手に入れ発言権を強めることに対して男性社会が抱く恐怖の裏返しが要因の一つであろう。本発表では、女性参政権が嫌悪され拒絶される過程を、主に当時の反フェミニズム小説を通して検証したい。

フェミニズム運動の歴史とトニ・モリスンの言説から考える ジェンダーと人種

森 あおい

1920年にアメリカで憲法修正第19条が成立し、女性選挙権が認められてから来年で100周年を迎える。女性選挙権獲得は、セネカフォールズ会議(1848)を契機に始まった女性権利拡張運動の主目的であり、憲法修正第19条の成立は、この運動が一定の成果を収めたことを意味している。

しかしフェミニズム運動の歴史を丁寧に紐解くと、この運動から黒人女性が排除されていたことがわかる。憲法修正第19条は、人種に関係なくすべての女性の選挙権を認めていたが、特に南部では様々な制約が加えられ、黒人は男性、女性とも選挙権を奪われていた。だが、白人女性は自分たちの政治的権利が認められると、他のマイノリティグループを支援することはなかった。

本発表では、フェミニズム運動の歴史とアフリカ系アメリカ人の関わりを俯瞰した上で、アメリカの法制度から取りこぼされた人々の主体性の回復のプロセスを、トニ・モリスンのテキストを基にジェンダーや人種の観点から検証していく。

第3部門「英語学」(中講義室4)

これからの英語コーパス研究

司会・講師	熊本学園大学教授	堀 正広
講師	熊本学園大学講師	矢富 弘
講師	北九州市立大学講師	木山 直毅
講師	京都外国語大学名誉教授	赤野 一郎

英語コーパス学会 20 周年記念行事の一つとして企画された、『英語コーパス研究シリーズ』（堀正広・赤野一郎監修、ひつじ書房）全 7 巻が今年刊行される。本シンポジウムは、この成果を踏まえて、コーパスを使った英語研究の可能性を追求していく。まず、司会の堀がこれまでのコーパス研究について概観した後、矢富講師が英語史研究の例として初期近代英語の宗教家の言語使用について分析する。次に、木山講師は統計処理の手法を使った研究の例として、米国大統領の一般教書演説をトピックモデリングを用いて解析する。堀は、コーパス文体論の研究例として英語表現史の視点から英国小説における身体表現に関して発表する。最後に、赤野講師は、コーパスがいかに英語辞書の編集に寄与してきたかについて論じる。

本シンポジウムは、コーパス研究の成果とさらなる可能性だけでなく、コーパス研究の問題点や落とし穴についても検討していきたい。

17 世紀説教文における言語と宗教的アイデンティティの関係

矢富 弘

本発表では、コーパスを用いた英語史研究の一例として、自作の歴史的コーパスを紹介し、そのコーパスから得られた知見について議論する。初期近代期の宗教家の言語使用と宗教的アイデンティティ (Anti-Puritans, Conformist Calvinists, Moderate Puritans, Radical Puritans) の関係を探るために、25 人の宗教家の説教文を収録した Corpus of Early Modern English Sermons を作成した。話者の言語使用が先進的であったか保守的であったかを特定するために、初期近代期に -th から -s へと急速に取って代わった三人称単数語尾の使用を調査した。その結果、政治や教会統治の中枢を担う Anti-Puritans は先進的な言語を好み、逆に Radical Puritans は英訳聖書の伝統に従い古めかしい言語を好んだことが明らかになった。これは個人のアイデンティティと言語使用が密接に関係していることを示唆する。三人称単数語尾については英語史で数々の研究が積み重ねられてきたが、大規模コーパスを使った本研究のアプローチは、この言語変化について新たな知見を提供することができる。

トピックモデルを用いた一般教書演説の通時的調査 —米国大統領の主要政治課題と語彙使用の変遷—

木山 直毅

テキストの潜在的意味を抽出する手法は古くから考案されてきたが、近年ではトピックモデル、とりわけ潜在的ディリクレ配分法 (Latent Dirichlet Allocation, 以下, LDA) の有用性が多方面から報告されるようになってきた。しかしそれらの多くは時系列的な側面を捨象した共時的な調査であり、通時的な変化を調査した報告はあまりない。そこで本研究では LDA を用いて 1790 年から 2019 年までの米国大統領の一般教書演説を解析し、(i) 大統領の関心事が 230 年を通してどのように変遷したのか、(ii) 一般教書演説における *nuclear* の使用がどのように変化したのかという 2 つの調査結果を報告する。これらの成果を踏まえ、テキスト研究や社会言語学的な通時的調査における LDA の有効性を論じる。

英語表現史における身体部位の描写について

堀 正広

Korte は、*Body Language in Literature* (1997)において、文学作品における身体表現の機能は、多岐にわたり、作家や作品において多様性が見られるだけでなく、時代の変化にともなって、そこには慣習と創造性が混在していると述べている。身体表現の機能とは、顔、体、手、足、目などの身体部位の描写やその動作や仕草の描写によって、人物の特徴や心情、さらには物の考え方を表す機能のことである。文学作品における身体表現は、各時代の文化と慣習を反映しながら、歴史的な視点から見ていくと絶えず発展し、多様化している。本発表では、そのような身体表現の多様性と創造性を英語表現史という歴史的な視点からコーパスを使って明らかにしていきたい。具体的には近代小説が成立した 18 世紀から小説の隆盛を誇った 19 世紀における代表的な小説をコーパスとして身体表現の変異をコーパス文体論の点から探っていきたい。

コーパスと辞書編集

赤野 一郎

全面的にコーパスを活用して編集された英語辞書の先駆けである COBUILD1 (1987) は、その後の学習英々辞典の編集に多大な影響を与え、1995 年にその影響が最も顕著な形で現れた。“corpus-based”を標榜した辞書の初版 (CIDE, HEED)および改訂版 (COBUILD2, LDOCE3, OALD6)が相次いで刊行されたのである。日本においても、コーパスを利用したことを明記する英和辞典が相次いで登場した。このように今日では、もはやコーパスを抜きにしての辞書編集は考えられない。ではなぜこれほどまでにコーパスが活用されるようになったのか。どのようにコーパスが利用されているのか。コーパスを活用することで、英語辞書、中でも学習英英辞典と学習英和辞典はどのように変わったのか。本発表ではこれらの点を念頭に、コーパスがいかに英語辞書の編集に寄与してきたかを論じる。

〈第2日〉10月27日（日）
研 究 発 表

第 1 室（中講義室1）

司会 福岡工業大学准教授 原田 寛子

**1. The Return of the Repressed:
An Analysis of the Uncanniness in the Repetitions of *A Pale View of Hills***

九州大学大学院博士後期課程 SUN JINGLU

Kazuo Ishiguro's debut novel *A Pale View of Hills* has been highly acclaimed and studied since its publication in 1982, among which *Sunday Times* commented it as "a macabre and faultlessly worked enigma."

This presentation tries to analyze *A Pale View of Hills* from a psychoanalytical perspective with a Freudian theoretical support. Through the analysis of the repetitions of identities, languages, settings and scenes, this presentation aims not only at solving the "enigma" of the story, but also at finding out "the great emotional force" hidden in the discourse. An expected conclusion is that the uncanniness in this novel not only functions as a narrative style but also as an emotional force, which contains great aesthetic value and resonating power.

司会 九州大学教授 鶴飼 信光

2. 時間と文学——ハリーポッターシリーズの時間的要素

保健医療経営大学准教授 小手川巧光

作家は、時間的要素（出来事の順序、感覚的時間の長短、etc.）をいかに作品中に織り込み、時間を操りたいという読む側の時間本性を巧みに刺激できるかどうか成功のカギを握る場合が多い。なかでもファンタジーは時間旅行というもう一つの時間的要素を加えることによって時間本性を無限大に刺激する可能性を秘める一方で、ストーリーに矛盾を起こしやすく、作品の出来映えを損なう可能性もある。

その点でJ.K.ローリングの『ハリーポッターシリーズ』は巧拙併せ持つ作品である。シリーズ全体を見ると、通常の文学ジャンルでよくみられる時間的要素の他に、ファンタジーならではの時間旅行が随所に描かれている。スリル、悲哀、推理などによって読者を強く引き込む技術もさることながら、読者の時間本性を程よく刺激する技術がみられる箇所と、必ずしも成功しているとは言えない箇所がある。本研究発表では、シリーズ全体からいくつかの箇所を取り上げて時間的要素の秀拙を考察する。

3. 『エマ』における誤解——感情の偽装と増幅と抑制

九州大学大学院修士課程 末吉 愛里

本発表では、登場人物たちの「誤解」によって物語が二転三転しあらぬ方向へと進んでいく点、個人の感情を「偽装」し、その偽装を利用して物語が進んでいく点を作品の特徴としてあげる。そこで本研究では、本作品のテーマの一つともなっている「誤解」は、「人間の心から湧き出る変えることのできない感情を意識的/無意識的に偽装し増幅あるいは抑制した結果」であるという視点から『エマ』を読み直すことを試みる。また、ジェーン(Jane Fairfax)とフランク(Frank Churchill)の秘密婚約を隠すための意識的な「感情の偽装」や、エマのナイトリー氏(George Knightley)に対する無意識的な「感情の偽装や抑制」、フランクへの意識的な「感情の増幅」など、誤解を増長させる様々な偽装的行動についての心理を明らかにしていく。本発表での「偽装」は、意識的であっても無意識的であっても、ある事実や感情を覆い隠すために、他の物事を装うことと定義して使用される。

司会 福岡大学准教授 渡部 智也

4. *Pickwick Papers* における声の文化と文字の文化 ——信じられる声、信じさせる文字

九州工業大学非常勤講師 原田 昂

Charles Dickensが作家として活動を始めたのは、声の文化から文字の文化への過渡期である19世紀英国であった。ただし、声から文字への変遷はこの時代に瞬間的に達成されたわけではなく、この2つのメディア形態が混在する期間を経て漸次的に行われた。Dickensは、初めて長編小説として初めて出版した*Pickwick Papers*において既に、声と文字という2つのメディア形態を正確に描写している。本作品において、すぐに消えてしまう声は、他者の反応や発話者の権威に応じて聴衆に信じられるものとして描かれる。一方、書かれると同時にその空間に留まる文字は、書かれた内容を一方的に読者に信じさせる。さらに作家は本作品の語り手を通して、この時代に特有の現象である声文化と文字文化が混在する様を描いている。本作品は、Dickensのメディアに対する意識を明らかにし、また19世紀英国に特有の情報伝達環境を正確に表現したものである。

5. ディッケンズの公開朗読台本をめぐって ——書かれたテキストと〈声〉

(招待発表) 鹿児島大学教授 井原慶一郎

チャールズ・ディッケンズは1853年から1870年に亡くなるまでの約16年にわたって472回にも及ぶ自作の公開朗読をおこなった。朗読台本を編纂したフィリップ・コリ

ンズは、「当時の評者たちは、公開朗読によって既知のテキストにどのような意味が付与されたかを説明するために様々な直喩を使った」と述べ、ディケンズの朗読が聞き手に与えたであろう「啓示」についてこう簡潔にまとめている。「自分自身で本を読む代わりに、ディケンズの朗読を聴くことは、誰かから手紙をもらう代わりに直接その人物に会うかのようなようだった——あるいは、二次元的な写真を見る代わりに、立体写真を見るかのようなようだった、または、ある絵画の複製の版画を見る代わりに、本物の絵画を見るかのようなようだった——もしくは、それは『古くからの知り合いの隠されていた秘密が突如発覚したときのような驚きや発見』に近い経験だった」(Collins, ed., *Charles Dickens: Sikes and Nancy and Other Public Readings*, Oxford UP, 1983, pp.viii-ix)。これらの説明を手掛かりに、本発表では、ディケンズの朗読によって、書かれたテキストにどのような意味が付与されたのかを、いくつかの代表的な朗読台本に即して具体的に考察してみたい。

第 2 室 (中講義室 2)

1. 【発表なし】

2. 【発表なし】

司会 鹿児島大学准教授 千代田 夏夫

3. ヘミングウェイを繰り返すデイビッド・ボーン ——『エデンの園』におけるモチーフの繰り返し

九州大学大学院修士課程 森田 司

ヘミングウェイの作品研究において、文体の繰り返しに関してはこれまでに数多くの研究がなされてきた。それに対して、モチーフの繰り返しという点ではあまり注目されていない。そこで本稿では『エデンの園』を題材に、モチーフの繰り返しを論じる。この作品は、故国喪失者の男女のフランス滞在を扱っている点で、『日はまた昇る』に類似しており、作品の大枠のモチーフが繰り返しだと言える。さらに、『日はまた昇る』では扱われていない、パリ滞在中の妻ハドレーとの関係、作家として「書くこと」といった、作者自身の体験の繰り返しもこの作品に多分に見られる。さらに、この物語は繰り返しを拒否しようとしても繰り返してしまうことによって展開する。そして、デイビッドの「書くこと」によって明らかとなる父への幻滅と、望まざる繰り返しは、ヘミングウェイ自身の父との関係、そして彼らの最期の共通性に呼応することとなる。本稿では作品に登場するこれらの負の繰り返しが編集によって与えられた明るい未来を感じさせる結末を否定するほどに強力であることを論じる。

4. *Almanac of the Dead* における Sterling の成長 —— “The Indian Ring” と石の蛇

福岡大学博士課程前期 大宅由加利

Leslie Marmon Silko は、小説 *Almanac of the Dead* の中で、先住民の命、文化、アイデンティティ、資源、土地のすべてを剥奪した当時の白人政府を批判的に描く。

今回の発表では、従来あまり注目されなかった Sterling の成長の過程を探る。Silko と同じ部族の Sterling は、聖なるものを穢した罪で部族社会から追放され、その後 Arizona 州 Tucson でメキシコの先住民 Yaqui 族の子孫の家で雇われる。

その Sterling は、Tucson の街がインディアン戦争により潤った史実等を知り、社会のからくりやその支配層が行った操作を見抜く目を持つ。また、部族の長老や愛するおば達が伝承しようとしたアメリカ先住民の古くからの教えの重要性を改めて理解する。アイデンティティを剥奪された Sterling が、一個人としての自信と誇りを取り戻す成長の過程を明らかにしたい。

司会 福岡大学教授 光富 省吾

5. ブロードウェイ・ミュージカルにおける人種とコミュニティ

(招待発表) 九州大学准教授 岡本 太助

20 世紀半ばに R. Rogers と O. Hammerstein によって完成されたミュージカルは、その後の *West Side Story* や *The Chorus Line* を経て、現代の *Avenue Q*、*In the Heights* そして *Hamilton* にいたるまで長い繁栄を謳歌することとなった。戯曲・音楽・ダンスなどの要素の有機的組み合わせが優れたミュージカルの条件であるとする神話が今なお根強く残るが、Scott McMillin が指摘するように、それらの要素の「混ざり合わなさ」こそがむしろアメリカン・ミュージカルを特徴づけていると言えるし、同じことは多民族社会アメリカそのものについても当てはまる。つまり、アンサンブルによって複数のキャラクターが同じ声を共有するミュージカルは、コミュニティとしての一体感を生み出しやすいものであるが、20 世紀後半のミュージカルは、アメリカというコミュニティを構成する要素の「混ざり合わなさ」(特に根強く残る人種対立)という現実と向き合うことで、自らを再構築してきたのである。本発表では、アメリカとミュージカルの共振関係を人種とコミュニティを手掛かりに探ってみたい。

第 3 室 (中講義室 3)

司会 西南学院大学准教授 前田 雅子

1. 二次述語構文の構造について——叙述の二次述語構文の統語構造

九州大学大学院修士課程 久保田 舞

本発表では、英語における二次述語構文について、それらが持つ統語的な振る舞いについて紹介し、それらに説明を与えることを目的とする。具体的には、英語における二次述語構文は、次のようなものである。

- (1) John painted the house red.
- (2) John ate the meat raw.
- (3) John may visit us sober.

(1)は、結果の二次述語と呼ばれるものであり、(2)、(3)はそれぞれ、目的語指向の二次述語、主語指向の二次述語と呼ばれるものである。これらの三種類の二次述語の間には、様々な統語的振る舞いの差が見られる。まず、WH 抽出に関して、結果の二次述語の WH 抽出は可能、主語指向の二次述語の WH 抽出は不可能、目的語指向の二次述語の WH 抽出は、文法性の判断に揺れが見られるという特徴がある。さらに、三種類の二次述語が節内に共起する場合、それらの順番は、結果の二次述語>目的語指向の二次述語>主語指向の二次述語と、固定されているという特徴もある。本発表では、これらの二次述語の特徴が、派生と構造の違いから導き出されることを説明する。

司会 宮崎公立大学教授 福田 稔

2. 主格目的語の派生と構造

九州大学大学院修士課程 森竹 希望

本発表では、日本語に見られる主格目的語がどう具現化するのかについて説明を試みる。日本語においては、Kuno (1973)が指摘するように、[+stative]を表す接辞（ここでは可能を表す「られ」）が動詞に付く場合は、目的語が主格として具現化してもよい。一方、英語では同じ意味を出す *can* が文中にあっても格の交替が起こらない。

- (1) a. ジョンは右手が_{NOM} 上げられる。
- b. *John can eat they_{NOM}.

では、この特異な現象をどう説明するのか。これに対する分析は Kuno (1973)、Koizumi (1994)をはじめとして多岐に渡るが問題も残る。Kuno (1973)に対しては、[+stative]の接辞が存在しても主格として具現化できない場合もある。また、Koizumi (1994)の目的語が TP 指定部まで移動するという分析に対しては、主格として具現化する目的語が VP 内に留まっていることを示す例もある。日本語では英語と違い、接辞が付くと動詞句の構造が豊かになると考えられる。それを鑑み、英語では観察され得ない目的語の主格と対格の具現化を構造で説明することを目標とする。

3. 遊離数量詞の派生と構造に関して

九州大学大学院修士課程 川満 潤

本発表では、数量詞遊離文の派生に関して、数量詞遊離は移動操作を伴う派生であるという立場から、その構造と派生に関して議論する。

Bošković (2004)では、数量詞は θ 位置で遊離することができないという一般化が提案されたが、(1)の文は一見、Bošković の一般化の反例のように見える。

(1) a. The students have [_{VP} all finished the assignment].

b. 学生たちがおそらく [_{VP} 3 人ハンバーガーを食べた]。

vP 周辺部に着目することで、数量詞が遊離している位置が実際には θ 位置ではなく、数量詞が他の機能範疇に属している可能性を示唆し、移動分析の新たな可能性を提供する。

同様に、数量詞を含む構造を詳細に観察し、その構造からの数量詞遊離の可能性を探る。

英語を中心に様々な言語データを用いて、 θ 位置では数量詞が遊離できないという Bošković の一般化の妥当性を検証し、数量詞遊離文の派生と構造を適切に捉えることのできる最適な理論を提案する。

4. 【発表なし】

5. 【発表なし】

第 4 室 (中講義室 4)

1. 【発表なし】

2. 【発表なし】

司会 琉球大学教授 石原 昌英

3. 悪役名の音象徴——悪役の名前を喚起する子音の調査

福岡大学 4 年 神谷 祥之介

音象徴の議論において、怪獣名には有声阻害音が頻繁に使用され、有声阻害音は悪い、大きいというイメージを喚起するとされる。しかし、対象を怪獣名に絞ると有声阻害音が強調するのは大きさか、悪役らしさなのかが不透明である。さらにそれ以外の子音が悪役らしさを喚起する可能性も検証されていない。本研究では悪役らしさというイメージに着目し、有声阻害音はそれを喚起するのか、さらに他の子音もそのイ

メージを現すかどうかを議論するためにイギリス人に知覚実験を実施した。実験の結果、有声阻害音は無声阻害音と比較すると悪役らしさというイメージを喚起する傾向が見られた。有声阻害音の他にも、r の平均値が共鳴音と比べると高く、悪役らしさを喚起する傾向も見られた。この結果と幼児の言語獲得の順序のデータを比較すると、獲得が遅いものほど悪役と判断されやすい傾向が観察され、言語習得における獲得時期と音象徴の関係性が示唆された。

司会 長崎大学教授 廣江 頭

4. 仮定法をとる *as though* 節と *even though* 節における *if* 節との *blending*

九州大学大学院博士後期課程 高場 清子

Takaba (2017)では副詞節 *if* には時制 *if*、仮定法 *if*、原因 *if*、前提 *if*、同格 *if*、逆接 *if* の6種類があると主張した。そのうち、逆接 *if* は *though* に置き換えることが可能である。そして、*as if* 節、*even if* 節には仮定法が生じるが、これらは仮定法 *if* である。一方、(1)のように *though* 節では仮定法が生じないが、(2)の *as though* 節、(3)の *even though* 節では仮定法が生じている。

- (1) **Though* I had looked at the map, I might not have got lost. (ATLAS English Grammar and Expressions 2017: 285)
- (2) She eats like a horde of locusts. She could gobble me up in a single bite *as though* I were an appetizer. (Publication information 2009, Vol. 94 Issue 1, p19-45, 27p, Title The Inheritance. Author Khalifeh, Sahar, Source FIC: Southwest Review), (COCA 2009)
- (3) I was doing a great job, *even though* I had done nothing, and they would bring me to meetings, during which people would come up with ideas about how to make the company more money ("it doesn't have to be antique to look antique") (Publication information # .Vol. 142, Iss.3; pg.152, 9pgs Title The November Fifteen, Author Nicholas Montemaranano, Source FIC: Esquire), (COCA 2004)

これはつまり、*as though* 節と *even though* 節の *though* と同意である逆接 *if* が、6種類の *if* 節のうちの仮定法 *if* に置き換えられたためであると考えられる。この現象を副詞節内における演算子移動の有無と、副詞節と主節の結合に注目して検証したい。

司会 福岡大学教授 古賀 恵介

5. 300 Years of English-Grammaticography and Stativity: 進行形を中心に

(招待発表) 九州工業大学教授 樋口 万里子

本発表は、近現代の英文法研究に見られる、Stativity と単純形・進行形の機能分担との関係を整理し、単純現在形の表象は *stative* に限られるが、進行形の現在分詞語幹動詞表象は、本質的には *aspect-neutral* であることを論拠と共に論じる。進行形の核心機能を「話者が視野を狭め事態を局所的に取り立てる」点にあると見ると、先行研究が記述してきた進行形の多様な側面に包括的な説明が可能である。例えば、進行形の唯一の範例として *love* の進行形を挙げる Lowth (1762: 56) や Webster (1784: 23~26) とともに、

進行形が時として醸し出す主観性・親密性・集中性・控えめさ、*I'm forever forgetting people's names* 等に有界性が感じられない場合もあること、とも矛盾せず、更に Generic 表現が進行形と馴染まない理由も説明できる。Stative な事態を表現する様々な進行形事例の意味とメカニズムを捉える。

References

- Lowth, R. (1762). *A short introduction to English grammar*. London: Millar and Dodsley.
Webster, N. (1784). *A grammatical institute of the English language*. Hartford: Hudson and Goodwin.

特 別 講 演 (大ホール)

司会 九州大学教授 大橋 浩

演題 行為指示表現における動詞と二重目的語構文

講師 北海道大学名誉教授 高橋 英光 (たかはし ひでみつ)

講演内容

動詞と項構造の関係については非常に多くの研究が多様な枠組みの中で行われている。しかしそれらの研究では発話行為がほとんど考慮されていなかった。この傾向は使用基盤主義と呼ばれる研究でも変わりがない。実際の言語使用において、母語話者は具体的な構文と切り離された動詞を処理するわけではないのと同じく具体的な発話行為と切り離された動詞や項構造を処理するわけではない。もし真の意味で使用基盤主義の立場を取るなら、発話行為を考慮しない動詞・項構造研究は不十分な使用基盤分析と言わざるをえない。

本講演では、行為指示 (directives) と呼ばれる発話行為が動詞と項構造に与える影響を調査する。具体的には、英語の2つの行為指示構文 Can you VP? と Why don't you VP? に焦点を当て、2つの構文が好む動詞と二重目的語構文の具現形を調査する。その結果、Can you 構文では tell を含む伝達動詞の使用頻度が高いが Why don't you 構文では直示移動動詞 come と go の使用頻度が高く、二重目的語構文の tell はいずれの行為指示構文でも間接目的語が圧倒的に1人称代名詞 (me/us) になるが (Can you/Why don't you tell me what's going on?), 二重目的語構文の give は Why don't you 構文で3人称代名詞の間接目的語の頻度が高いこと (Why don't you give her a chance?) などを報告し、これらの観察結果を動詞の意味、二重目的語構文の意味、行為指示表現の相互作用の観点から説明する。最後に、このような分析が、英語学研究、認知言語学の構文研究さらに英語教育にどのような意義をもつかを考える。

講師紹介

1952年北海道小樽市生まれ。北海道大学大学院博士課程中途退学、北海道大学助手、小樽商科大学講師、同助教授、北海道大学大学院文学研究科教授、特任教授を経て、現在、北海道大学名誉教授。北海道大学在職中にカリフォルニア大学サン・ディエゴ校言語学科にて在外研修。また北海道大学より博士 (文学) の学位を取得した。専門は英語学、認知言語学。これまで日本英語学会の運営委員長、学会賞委員長、評議員、理事、日本英文学会北海道支部長を務めている。

主な著書として *A Cognitive Linguistics Analysis of the English Imperative: With Special Reference to Japanese Imperatives* (2012年, John Benjamins, 第46回市河賞/第5回日本英語学会賞)、『英語の命令文 神話と現実』(2017年, くろしお出版)、『言葉のしくみ 認知言語学のはなし』(2010年, 北海道大学出版会)、『認知言語学とは何か あの先生に聞いてみよう』(2018年, 野村益寛氏・森雄一氏と共編著, くろしお出版)、『認知言語学 基礎から最前線へ』(2013年, 森雄一氏と共編著, くろしお出版)、主要論文として“Indirect Anaphors: Definiteness and Inference” *Leuvense Bijdragen (Leuven Contributions in Linguistics and Philology)* 86(1/2), (1997年)、“English Imperatives and Speaker Commitment” *Language Sciences* 16(3/4), (1994年)、などがある。